
妻が消えた日。

折原神威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妻が消えた日。

【Zコード】

Z5705M

【作者名】

折原神威

【あらすじ】

3ヶ月前に妻が消えた。

と同時に、3ヶ月前から僕にはとある趣味ができた。。

雷鳴の「うるささが、僕を夢から連れ戻した。エメラルドグリーン色のカーテンの向こう側は、雨が降っている。どうやら今日も妻は帰らなかつたみたいだ。ダブルベッドが広く感じる。妻の美幸が消えてかれこれ3ヶ月。妻が消えたという一大事なのに、大して取り乱さなかつたのは我ながら驚きだ。

果たして私は妻を愛していたのだろうか。

妻がいなくなつてから私には樂しみができた。それは、寝室の隅に置いてある鉢植えに水をやる事だ。が、しかし、私は植物に水を与えているのではない。ただ単に土に水を撒いているのである。これは比喩でも特別な言い回しでも無い。鉢植えには、本当に植物など植えられていないのである。

この日は、いつもより多めに水を与えた。

一体妻はいつになつたら現れるのだろうか。

なぜ、妻はいなくなつたのか。

僕はそればかりを考えた。

妻が消えた3ヶ月前を思い返してみると、妻が消えた理由にも思い当たる節がある。

ただひとつ言えるのは、私は妻を愛していた。全てを愛おしいと感じていた。

髪の毛の一本一本、皺の無い肌、足の爪、右手の小指、そして、眼

球に至るありとあらゆるものが愛おしかつた。全てが欲しかつた。彼女から抜け落ちた体毛を私は大事に保管してあるし、彼女が切つた爪も、丁重にとつてあるのだ。私は、彼女の全てを自分のものにしたかつた。

しかし、彼女はそれを拒んだ。

彼女は私のものになる事を嫌つた。

彼女は私を裏切つた。

気がつくと、私は風呂場にいた。湯船のお湯は真つ赤に染まつている。

そして、

私の隣にある赤いモノ。そして、隣に落ちているノ「ギリ。よく見ると、赤いモノの正体は肉だつた。しかし、それが何の肉かは定かではないが、鮮やかな深紅の肉がある事から、まだ新しい、新鮮な感じがする。私は、キッチンへ戻り、急いで包丁を持つてきた。そして、最も新しい肉の塊から、一切れ切り取り、口に運ぶ。やはりと思つた。この、よく分からぬ肉は食べる事ができるのだ。さらに、もう一切れと思い、私は、肉塊を漁つた。マンガでしか見た事のない、骨付き肉もある。私は、とたんに空腹を覚えた。

私はその肉塊を全てボウルに入れ、キッチンへ運ぶ。鮮度が落ちる前に冷蔵庫で保存する事にしたのである。しかし、肉は相当な量があり、いつになつたら食べ切れるのか分からぬ。私は、骨と肉とを分け、肉には防腐の意味を込めて香辛料で下味を付けた。骨は、捨ててはいけない気がした。だから、私は植木鉢に植える事を思いついた。妻のわがままで買った大きな冷蔵庫が、初めて役立つた。と同時に、私は植木鉢に水を与えるようになつた。

私は妻と一緒にディナーにしようと思った。

飛び飛びではあるが、あまりにも鮮明な3ヶ月前の記憶。
しかし、妻が消えた理由を解き明かしてはくれない。
もしかしたら、僕には一生分からないのかも知れない。

エメラルドグリーン色のカーテンの隙間から、太陽の光が差し込ん
できた。

午前7時00分。

今日の朝ご飯は田玉焼きにしようと思つ。

(後書き)

以前、違うサイトにヒヤした作品の改定版です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5705m/>

妻が消えた日。

2010年10月19日15時35分発行